

18. クリスチャンの生産と永遠の報酬

ペテロの手紙#18

<https://ichthys.com/Pet18.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士著

はじめに： クリスチャン生活の目的は靈的に成長することであり、他の人々も同じように成長するように助けることであることを説明してきました。今までの研究では、この目的の最初の部分、すなわち個々のクリスチャンとしての私たちの靈的成長を扱う、神の計画の四つの段階のうちの一つを取り上げてきました。最初の三つの段階とは、1) **聞くこと** (信者として、神についての情報を得るために積極的に行動すること)、2) **信じること** (聖書の真理を信仰によって心に受け入れ、自分の考えの一部にすること)、3) **生きること** (この真理を積極的に生活に適用すること、特にストレスや試練の時に真理の原則に考えを集中すること、真理に従って生きるように努力すること、信仰、希望、愛の徳を生活に適用すること) でした。これらの最初の三つのステップ (これはクリスチャンとしての経験を通じて継続しなければなりません) は、私たちの人生に対する神のご計画の第四段階である「**助けること**」を始めるための基本的な準備であり、また成長を支える土台です。他のクリスチャンを助けること (そして他の人がクリスチャンになるのを助けること) は、この地上における私たちの目的の究極の成就であり、私たちの天の報いの基盤です。それはまた、私たちの義務でもあります。他の人の助けによって成熟し始めたら、愛の手を差し伸べて、他の人が同じように成熟するのを助けるのが私たちの責任だからです。

IV. 助けること： 「ミニスター < minister: 牧師, 奉仕者, 伝道者 >」と聞けば、多く人は地元の教会の牧師を思い浮かべるでしょうが、牧師は確かに聖書的な意味での「奉仕者」ですが、実はこの言葉には、信者がキリストの教会の他のメンバー (そして未信者にも) に与えるすべての助けや奉仕が含まれています。ギリシャ語のディアコノス (δίακονος) は文字通り「しもべ」または「仕える者」という意味です。キリストが、弟子たちの間で争いがあったとき、「一番偉くなりたい者は、皆のしもべにならない」 ([マタイ 20 章 26-27 節](#)) と言われましたが、この言葉を「奉仕者」も正当であると言えるでしょう。しかし問題は、「ミニスター (minister)」という英語の言葉が、「権威」「地位」「名誉」「選ばれた者」といった意味合いを持ってしまっていることです。これらはギリシャ語の「仕える者」にはまったく含まれていない意味です。実際には、キリストのからだ (すなわち教会) に属するすべての信者が、その全体に対する「ミニスター (つまり仕える者)」なのです。体の一部である目や耳、腕や足が、それぞれ独立してはた

らくことができないのと同じように、どの信者も他の人々から切り離されて存在することはできません([第一コリント 12 章 12-26 節](#))。神はキリストの教会をそのように設計されていて、私たち一人ひとりに果たすべき仕事を与えておられます。つまり、すべてのクリスチャンの「一員」は、他の「からだ」のために行う大切にユニークなミニストリー(つまり奉仕の働き)を持っているのです。その中には、目立って立派に見える働きもあれば、ごく普通に見えるものもあります。注目を集める働きもあれば、ほとんど誰にも気づかれないようなものもあります。今の世で多くの報いを受けるように見えるものもあれば、かえって多くの損失をこうむるように見えるものもあります。ただ一つだけ確かなことがあります。それは、神が私たち一人ひとりに、キリスト者として果たすべき「奉仕の働き」を与えておられるということです。そして、私たちが本当に問うべきたった一つの重要な質問は、「自分はその働きを実行しているのか、それともしていないのか?」ということなのです。

実を結ぶこと :

わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっている枝で実を結ばないものは、父がすべてこれをとりのぞき、実を結ぶものは、もっと豊かに実らせるために、手入れしてこれをきれいになさるのである。(ヨハネ15章1-2節)

私たち神に従っていこうとする者(上記の枝のように実を結ぶ者)にとって、神は私たちの人生を導き、キリスト者としての実を最大限に結べるようにしてください。さらに、私たちがイエス・キリストにあって新しく創られたのも、まさにこの目的のためなのです([エペソ 2 章 10 節](#))。しかし、私たち「枝」がたとえ実を結ぶための働き手であったとしても、その良い働きの源はすべて神にあるということを忘れてはなりません。私たちは主であるイエス・キリストから離れては何も「実を結ぶ」ことはできませんが、主に従い、従順に歩み、「主にとどまる(abide)」なら、私たちは神から力を与えられ、自分が選ばれた特別なミニストリー(奉仕)を果たすことができます([ヨハネ 15 章 5 節](#))。

また、実り豊かな生産を霊的成長から切り離すことはできません([コロサイ 1 章 10 節](#)で両者は結びついています)。霊的な未熟さは、私たちが他の人々の霊的な成長を助けるために教会に与えることができる助けを必然的に制限します。このことは、私たちがあるレベルの霊的成長を遂げるまで実を結ばないことを意味するものではありません。しかし、他の人の成長を助けるためには、当然、自分自身も成長していなければならないというのは自然なことです。ヘブル人への手紙の著者は、この点で聞き手たちを責めています。彼らは長い間クリスチャンであったにもかかわらず、本来なら他の人々に

与えるべき助けを、自分たちがいまだに他者から受けている状態だったのです ([ヘブル 5 章 12 節](#))。

神の御言葉を聞き、信じ、実践することによって霊的な進歩を遂げることをいつまでたっても怠る信者は、その生産に限られているのに気づきます。種まきのたとえば、人生の心配事や富や快樂を乗り越えることを怠る信者は、雑草に塞がれた植物のようなものだと教えています。人生の思い煩いは、彼が植えられたその目的のために実を結ぶのを妨げてしまいます。 ([マタイ 13 章 22-23 節](#); [ルカ 8 章 14 節](#))

[ヨハネによる福音書 15 章 2 節](#)に出てくる「切り取られる枝」が語っているように、「まったく実を結ばない」という状態は重大な問題です。この点については、「タラントのたとえ」でも同じことが語られています。このたとえでは、有能に働いたしもべたちは主人からほめられ報いを受けましたが、自分のタラントを地に埋めて何もしなかったしもべは、主人によって外の暗闇に投げ出されました ([マタイ 25 章 14-30 節](#))。このたとえの中でタラントを埋めたしもべと、ヨハネ 15 章 2 節で切り捨てられる枝とは、どちらも**不信仰な者**を表しています。真の信者であれば、**まったく実を結ばない**ということはあり得ません ([ヤコブ 2 章 26 節](#))。とはいえ、私たちは「最低限の実だけを結ぶしもべ」のようにはなりたくないはずです。そのしもべは「タラント」は与えられていたのに、せいぜい「利息」程度しか生み出せませんでした ([マタイ 25 章 27 節](#))。ある人は他の人より多くを与えられているように見えるかもしれませんが、私たちすべてには、それぞれにふさわしい霊的な「タラント(才能、資源)」が与えられており、それをこの世で神のために用いるよう命じられています。私たちは、「関心/興味→interest (英語では「利子・利益」の意味を併せ持つ)」を失い、それによって自分のユニークな宣教の機会が生かされないままにならないように気をつけなければなりません。もし私たちが霊的に成長してきたのなら、それは名前も挙げきれないほど多くの人たちから助けを受けてきた結果なのです。それならば私たちも、今度は他の人々に何かを返し、助けの手を差し伸べ、彼らが霊的成熟へと向かう旅路の中で支えとなるべきではないでしょうか。自分が助けられてきたように、他の人々をも助けるべきではないでしょうか。

生産とは何か？

I. 生産とは「与えること」である

木が実をならせるとき、その生産は、その実を収穫して食べる人々にとって祝福となります。同じように、私たちクリスチャンの「生み出すもの」も、自分自身のためではなく、他の人々の人生を祝福するためにあるのです。「実を結ぶこと」は、本質的に「与え

る行い」です。これは常に、他の人の霊的な益(えき)のために、努力と自己犠牲を伴うものです。重要なのは、その贈り物の大きさではありません。やもめ(夫を亡くした女性)のささげたわずかな金額は、金持ちたちの多くの金額よりも神の目には「多い」とされました([マルコ 12 章 42 節](#); [ルカ 21 章 2 節](#))。また、贈り物の種類も問題ではありません。たとえ主の名によって差し出される冷たい水一杯であっても、それは報いを受けずには終わりません([マタイ 10 章 42 節](#); [マルコ 9 章 41 節](#))。そして、その贈り物は物質的なものである必要もありません。教えること、慰めること、励ますこと、親切なことば、助けの手、主の名によって、主の栄光のために行われる愛の言葉や行い。これらこそ、クリスチャンの愛からあふれ出る贈り物であり、私たちの霊的な賜物(たまもの)を最もよく生かすものです。そして何よりも、それらは、神が私たちにくださった最大の贈り物——御子イエス・キリスト——を思い起こさせるものです。

クリスチャンの「与えること」と呼ばれるものの生産、奉仕、働き、クリスチャンの奉仕、またはどんな名前を使うにしても、それは単にお金の贈り物を与えることを超えています。パウロは、ピリピの人々の自分に対する恵み深い献げ物を称賛しながらも、彼らの行動が示した正当な働きに対して与えられた報いのほうを、受け取ったお金よりもはるかに喜んでいることをはっきり示しました([ピリピ 4 章 17 節](#); [第二コリント 8 章 1-4 節](#))。今日の冷めた世界では、このような言葉を疑ってかかりがちです。しかし使徒パウロの場合、この気持ちは本物であると確信できます。なぜなら、主のためにこれほど極端な苦難と欠乏の生活を送った者はいないからです([第二コリント 11 章 16-33 節](#))。パウロにとって、お金はただの「種」または奉仕の手段の一つにすぎません([第二コリント 8 章 9 章](#))。お金を与えることは、努力(お金を稼ぐこと)と自己犠牲(お金を手放すこと)が必要であり、この点でどんなクリスチャンの働きとも似ています。つまり、神のためにするどんな奉仕も、本当の奉仕であるためには、自分を捧げて他の人の救いと成長を助けるものでなければなりません。キリストは、求める人に与えるよう教えられました([マタイ 5 章 42 節](#))。ですから、私たちはキリストの教会の経済的な必要を無視してはいけません。しかし同時に、お金が親切な行い、励ましの言葉、取りなしの祈り、または教会を建て上げるために必要な真理の教えの代わりになると考えてはいけません。

聖書は、アベルが死んでいても、彼がささげたいけにえを通して神への信仰をこの世に証ししていると教えています([ヘブル 11 章 4 節](#))。彼の血のいけにえは、罪の代価を支払うための代わりの者、すなわち救い主の必要性を表していました。アベルはそのいけにえを通してこの事実を認めましたが、それによって隣人に物質的な利益(例えば慈善にお金を与えること)をもたらしたわけではありません。しかし、神が彼に与えた重要な目的を果たし、その目的は今も実を結んでいます。これによって、最初

の人類の歴史の始まりから、真の信者は救い主の必要性と約束の両方を理解していたことを私たちに示しています。

過去の多くの信者の場合も同じことが言えます。彼らの最も長く続く奉仕のいくつかは、今日まで私たちを励まし続ける信仰の行いです。ヤコブは、行いのない信仰があると言う信者たちを厳しく非難するとき、良い行いの例として、非常に困難な試練で神に従うアブラハムの姿を挙げています。それは、唯一の息子イサクのいけにえです([ヤコブの手紙 2 章 21-23 節](#))。アブラハムのこの従順な行いは、他の信者に物質的な利益をもたらすものではありませんでしたが、今日も私たちに奉仕しており、アブラハムのように神を信頼するよう励ましてくれます([ローマ 4 章 17 節](#))。過去の他の偉大な信者たちも同じです。ダニエルやダビデ、ステパノは、お金の献げ物によって偉大なのではなく、神への信仰の行いを通して神の誠実さを証した結果として実を結んだからこそ偉大なのです。聖書に登場するこのような象徴的な事例において、これこそが捧げものの本質なのです。。すなわち私たちを喜ばせる実とは、神を賛美しながら、私たち自身のクリスチャン生活を励ます、生き生きとしたダイナミックな神への信頼なのです。この種の「実」は、十分に熟するためにはある程度の霊的な成熟を必要とすることでしょう。

というわけで、私たちは元のテーマに戻ってきました。霊的な働きにおいて最も効果的であるためには、まず、これまでの学びの中心であった「聞くこと」「信じること」「生きること」という過程を通して、ある程度の霊的成熟に達する必要があります。というのも、もし私たちがまだ本当に神を信頼する段階に達していないのであれば、信じていない人たちに対して、どうして彼らが神を信頼すべきだと効果的に証しすることができるでしょうか？また、もし私たちがまだ天にある報いを本当に信じていないのであれば、悲しむ人をどうやって慰めたり、霊的に疲れた人たちをキリストにある喜びへと励ますことができるでしょうか？さらに、もし私たちがまだ人生のすべてを超えて神を愛することを本当に学んでいないのであれば、神のために多くの犠牲をともなう働きをどうして引き受けることができるでしょうか？これらはほんの一例にすぎませんが、どのような奉仕であれ、それを行う者の心にある程度の「霊的な蓄え(ストック)」が備えられていなければ、その奉仕は決して十分に効果的にはならないでしょう(いや、そもそも始まることすらしないかもしれません)。

霊的な実を結ぶこと(=霊的な働き)は、まず第一に「与えること」です。それは神に対してではなく、私たちのクリスチャンの仲間たち、そして将来クリスチャンとなる可能性のある人々に対して与えることです。神は私たちから何かを必要としておられるわけではありません([使徒行伝 17 章 25 節](#))。実際のところ、神は教会にゆだねられているあらゆる奉仕の働きを、ご自身で何の労苦もなく成し遂げることができるお方です。ですから、私たちは実を結ぶこと、すなわちクリスチャンとして「与えること」の本当の意味

を正しく理解する必要があります。それは、神が自ら簡単に手入れできるぶどう園で、私たちが働くことが許されているという、まれで特別な特権なのです。そしてそれは、私たちの主イエス・キリストという何よりも偉大な賜物(たまもの)に対する感謝と、またそれを見習って、自分自身の一部を捧げることなのです([第二コリント 9 章 15 節](#); [ローマ 5 章 15-17 節](#))。

II. 生産に御霊の力を

権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである。(ゼカリヤ 4 章 6 節)

私たちは単なる枝であって、宿っているぶどうの木であるお方から離れては、生産することはできないことをすでに見ました([ヨハネ 15 章 1-2 節](#))。私たちは皆、神のご計画の中での道具にすぎません——ただし、私たちが神から与えられた働きに自ら進んで参加することが求められているという点で、単なる道具とは異なります。神に受け入れられるような働き(霊的生产)は、人間の考えや人間の力だけによって達成されることは決してありません。神はこの世が造られる前から、私たちがこの地上の人生で行うべき「良いわざ」をご計画されて([エペソ 2 章 10 節](#))、そのどれ一つとして、神の御霊(=聖霊)の助けなしに、正しく行うことはできません([第一コリント 12 章 3 節](#))。イスラエルの民がバビロン捕囚から帰ってきた時代、神殿の再建は困難で圧倒されるような仕事でした(これは[ゼカリヤ 4 章 6 節](#)の背景です)。それと同じように、今日の私たちに与えられている様々な奉仕の働きも、私たちには不可能に思えるかもしれません。しかし、神にとって不可能なことは何一つありません([創世記 18 章 14 節](#); [ルカ 1 章 37 節](#)参照)。神がゼルバベルに対して、「わたしの霊による」と励まされたように、私たちキリスト者も、御霊が私達と共におられるだけでなく「私たちのうちに」住んでおられる([ヨハネ 14 章 17 節](#))ことを思い出し、たとえその働きが一見乗り越えられないように見えても、奉仕の中での困難に直面するときに、心を強く持つべきです。

聖霊は、すべての奉仕の働き、またすべての霊的賜物の働きを力づけるお方です([第一コリント 12 章 6 節後半](#), [11 節後半](#))。私たちは枝として、聖霊が私たちを通して実を結ばせてくださいます。それは、模範的なクリスチャンとしての生き方という「実」([ガラテヤ 5 章 22 節](#))であり、他の人々へのより直接的な奉仕によって結ばれる「実」でもあります。このような実を結ぶ働きの中心となるのが、その人が持っている霊的賜物です。私たち一人ひとりには霊的賜物を与えられており、それを決め、与え、それを働かせるのは聖霊です([第一コリント 12 章 11 節](#))。もし私たちが本当に奉仕をしようとするなら、神が私たちのために選ばれた賜物が、必ず正しく働くように導いてくださると信じなければなりません。もし万が一、私たち自身が「自分になりたい」と思うような教会内の

役割に向いていないように感じたとしても、私たちは以下の三つのことを覚えておくべきです。1) 教会という「からだ」のすべての部分(器官)は、どれも欠かすことのできない存在であるということ([第一コリント 12 章 12-26 節](#))。2) 神がご自身のご計画の中で与えられた「第一の、最良の運命」から逃げようとしてはならないということ([ヨナ 1 章 1 節 -3 章 3 節](#))。3) 霊的賜物を選ばれたのは神ご自身であるということ。だからこそ、私たちはその神の選びを尊重し、それが最善であると信頼すべきです。最後に、現在働いていない霊的賜物——たとえば異言、預言、癒しなど——に対して、それらを「欲しいと願う」こと自体がふさわしくないことであるのは言うまでもなく、ましてそれを「追い求める」ことなど、決してすべきではありません。理性あるクリスチャン(つまり、感情を否定するのではなく、それを理性によって制御するクリスチャン:[第一コリント 14 章 32-33 節](#), [14 章 40 節](#))として、私たちは、これらの賜物が現在は聖霊によって割り当てられていないという事実を受け入れるべきです。それはちょうど、聖霊が今はもはや新しい使徒を任命しておられず、また誰かが新たに聖書に章を書き加えることも許しておられないのと同じことです。

聖霊による、私たちのクリスチャンとしての奉仕の場の選定とそれに対する力づけは、単に霊的賜物の種類を決めることにとどまらず、私たちの働き全体——つまり「生産のすべて」——を含んでいます。[第一コリント 12 章 4-7 節](#)では、私たちの奉仕のすべての面が神の御手のもとにあることが示されています。すなわち、多様な「賜物」、「奉仕」、「働き」がありますが、それらすべてを導いておられるのは「同じ御霊」なのです。この三つの分類は、次のようなものです。1. 特定の霊的賜物(たとえば、助け、励まし、伝道など)。2. 特定の奉仕の場(世界中の教会における、指導や奉仕の具体的な役割)。3. 働きの「効果」、つまり成果のあらわれ方。最初の二つは比較的わかりやすいでしょう。たとえば、あなたは「助け」の霊的賜物を与えられているかもしれませんが、地域の教会の建物の維持管理を助けるという具体的な奉仕の場において、その賜物を用いているのです。しかし、第一コリント 12 章で言及されている三番目の分類——「働き(効果)」——は、私たちにとって最も示唆に富んだものです。つまり、あなたの奉仕がどれほど効果的であるかは、あなた自身の努力だけによって決まるのではなく、あなたが働いている「畑(土地)」——つまり環境や人々の受け入れ具合——の「肥沃さ(ひよくさ)」にも左右される、ということです。その畑の土は、豊かかもしれませんし、貧しいかもしれませんし、その中間かもしれません。しかし神は、そうしたすべてをあらかじめご存じであり、ご計画の中に入れておられるのです。ですから、たとえば伝道者の場合、救われた人の数によって奉仕の成果が評価されるわけではありません。むしろその奉仕は、別の基準によって評価されます——すなわち、自分が任された畑の可能性に対して、自分の務めをどれほど忠実に果たしたか、という観点です。実際、エレミヤや旧約聖書の多くの預言者たちは、当時の状況において目に見える成果がほと

んど現れなかったのです。ですから、たとえ自分の奉仕が、他の目立つ奉仕と比べて意味がないように思える時でも、落胆すべきではありません。なぜなら、私たちは神のご計画に従って、ちょうどよい時に実を刈り取ることになるからです([ガラテヤ 6 章 9 節](#))。聖霊の力によって、私たちが神のご計画された奉仕を忠実に果たすとき、神はその奉仕を通して、御心にかなった効果を実現されるのです(参照:[イザヤ 55 章 11 節](#))。

III. 生産は報われる

だから、愛する兄弟たちよ。堅く立って動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。主にあっては、あなたがたの労苦がむだになることはない、あなたがたは知っているからである。(第一コリント15章58節)

キリストを信じる者として、私たちは永遠に生きる者です。私たちは栄光に輝く体によみがえらせられ、永遠に主とともに住むこととなります。そして、パウロが第一コリント 15 章でよみがえりについて長く語ったその締めくくりに、上記の言葉を語っています：私たちの働きは、キリストにあって決して無駄になることはありません。なぜなら、私たちは主とともにいて、その働きの実を永遠に喜ぶことになるからです。

1. 裁きと報酬

見よ、わたしはすぐに来る。報いを携えてきて、それぞれのしわざに応じて報いよう。(黙示録 22章12節)

多くの他の聖書箇所と同様に(例:[イザヤ 40 章 10 節](#); [62 章 11 節](#) など)、この箇所は、私たち一人ひとりが地上での生涯について裁きを受けることになることを明確に示しています。

その裁きにおいては、「肉体にあって行ったこと、善であれ、無価値であれ」([第二コリント 5 章 10 節](#))に応じて報いを受けるためなのです。主の再臨が差し迫っていること、そしてその主ご自身が私たちの人生を評価されるという事実は、私たちが神の御国の働きに忍耐をもって励むための、十分な動機となるはずですが、もし私たちが、神が望まれるかたちで霊的に前進しているのであれば、この地上における時間と奉仕に対する報いの原則は、私たちにとって励ましとなるはずですが、なぜなら、神は出し惜しみされる方ではなく、むしろあふれ流れるほどに十分に与えてくださる方であり、私たちがさげすまれたすべてのものに対して、豊かな報いを約束しておられるからです([マタイ 10 章 42 節](#), [19 章 29 節](#); [ルカ 6 章 38 節](#); [エペソ 6 章 8 節](#))。

2. イエス・キリストは裁き主

なぜなら、わたしたちは皆、キリストのさばきの座の前にあらわれ、善であれ悪であれ、自分の行ったことに応じて、それぞれ報いを受けねばならないからである。(第二コリント5章10節)

神はイエス・キリストを、生きている者と死んだ者との裁き主としてお立てになりました(使徒行伝 10 章 42 節)。この任において、主は御父に代わってこの世界を裁かれます(ローマ 14 章 10-12 節; 第二テモテ 4 章 1 節; 4 章 8 節)。キリストの「裁きの座(βῆμα [ベーマ])」とは、すべての信者がそこに現れ、この地上の人生について責任を問われる裁きの場です(ローマ 2 章 16 節; ヘブル 13 章 17 節と第一ペテロ 4 章 5 節を参照)。私たち一人ひとりが、自分が行ったこと、あるいは行わなかったことすべてについて、主の前で説明しなければならないのです(ローマ 14 章 12 節)。ですから私たちは、「あらゆることにおいて主に喜ばれる者であるように」努めるべきです(第二コリント 5 章 9 節)。そして、この裁きの時が、永遠の報いを確かにする時となるように、また人生が虚しいものであったことをさらけ出すことにならないように目指すべきです(第一コリント 3 章 11-15 節)。

3. 審判の性質

こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない。(ローマ8章1節)

クリスチャンの人生に対する評価(裁き)は、将来行われる他の種類の裁きとは本質的に異なります。イエス・キリストを信じる者として、私たちはもはや神の刑罰としての裁きの下にはありません(ヨハネ 3 章 18 節)。私たちは、生と死の裁き(信じない者が受けるもの)に入ることはなく、すでに「死からいのちに移されている」のです(ヨハネ 5 章 24 節; 第一コリント 11 章 15 節参照)。したがって、私たちが受ける評価は、この地上でのクリスチャンとしての働きの価値を判定することに焦点が置かれます(第一コリント 3 章 10-15 節)。

4. 裁きのプロセス

わたしは自ら省みて、なんらやましいことはないが、それで義とされているわけではない。わたしをさばくかたは、主である。だから、主がこられるまでは、何事についても、先走りをしてさばいてはいけない。主は暗い中に隠れていることを明るみに出し、心の中で企てられていることを、あらわにされるであろう。

その時には、神からそれぞれほまれを受けるであろう。(第一コリント4章4-5節)

主が私たちの人生を評価される際、その基準は、私たちがこの地上で用いている基準とは必ずしも同じではありません。主は私たちの心の中の隠れた動機を、すべてご存じです。私たちが何をしたのか、そしてそれが主によって召されたものであったかどうかだけでなく、なぜそれを行ったのか、その「理由」までも、主はご存じなのです(ローマ2章6-10節)。ですから、たとえこの世が私たちの働きを理解せず、評価してくれなかったとしても、この地上で主のために労することは、それゆえに無駄になるわけではありません(第一コリント15章58節)。同じように、この世で「主のため」と称してなされるすべての働きが報いを受けるとは限りません。第一コリント3章10-17節において、パウロは主がどのように私たちの地上での働きを裁かれるかを説明しています。そこで用いられる基準は、非常にシンプルです。すなわち、報いを得るためには、私たちが行ったすべてのことが「イエス・キリストという土台の上に築かれていなければならない」のです(11節)。言い換えれば、正当な働きとは、他の人々をキリストに向けさせ、キリストを信じる者たちの「信仰」「希望」「愛」を育て、強める働きです。この基準に合致するすべての働きには、本当の価値(12節にある「金、銀、宝石」)があります。そのような正しい働きには報いが与えられます。しかし逆に、私たちが神から与えられた時間と資源を用いることが益をもたらさず、イエス・キリストの土台の上に「建て」上げられておらず、同胞である信仰者たちの信仰と希望と愛が強められないのであれば、この方面での私たちの努力はすべて無駄になります。これらの働きは「木、草、穀殻」です。私たちが受ける評価の日には、私たちが行ったすべてのことが明らかにされます。その働きは「火によって」試されるのです(13節)。正しい働きはこの火の試練に耐えますが、キリストの福音や聖徒たち(信者たち)の霊的成長に貢献しなかった働きは、焼き尽くされてしまいます。主が私たちのクリスチャンの労苦のさばき主であるというのは、心強いことではありませんか。私たちの忠実な審判者は、私たちが主のために成し遂げたことの真の価値を見定められることでしょう。同時に人の目に価値のあること、感情を掻き立てる多くのものは火の試練に耐えないのです。

この地上での時間を無駄にした信仰者であっても、その人自身は救われます:信仰を保ち続けるなら、その行いは滅ぼされても、その人自身は救われるのです(15節)。しかしここで重要なのは、パウロが正しい働きや単なる無駄な働きのほかに、神の教会に対して積極的に害をもたらす行いという別のカテゴリーを含めていることです。そのような者は神の裁きを受けることとなります(17節)。最後に、報いを受けるかどうかは、最終的には私たちの信仰を守り続けるかにかかっています。もし最後までキリストへの信仰を堅く持ち続けられなければ、報いも共に失われます。なぜなら、信仰と同じように、報酬は失うこともあれば得ることもあるからです。第一コリント9章24-27節; 第二ヨハネ1章8節; 黙示録3章11節)

5. 裁きの時

また、彼は大いなるラツパの音と共に御使たちをつかわして、天のはてからはてに至るまで、四方<四方の風-欽定訳>からその選民を呼び集めるであろう。(マタイ 24 章 31 節)

主が栄光と勝利をもって地上に再び来られるとき、私たちが主と共に集められて会うこととなります([第一テサロニケ 4 章 14-17 節](#); [第一コリント 15 章 50-58 節](#))。主の再臨の時と「主と共に集められる」時([第二テサロニケ 2 章 1 節](#); 参照:[イザヤ 27 章 12-13 節](#))は、私たちの評価と報いの時の始まりでもあります([マタイ 16 章 27 節](#), [19 章 28 節](#), [20 章 8 節](#); [ルカ 14 章 14 節](#); [黙示録 11 章 18 節](#))。主イエスは、第二の来臨において悪魔の支配する世を打ち破られた後[マタイ 24 章 29-31 節](#); [黙示録 19 章 1 節-20 章 6 節](#)、イスラエルの徹底した評価が行われます([イザヤ 1 章 25-28 節](#), [4 章 2-6 節](#); [エゼキエル 20 章 33-38 節](#); [ゼカリヤ 13 章](#); [マラキ 3 章 2-3 節](#); [ローマ 11 章 26 節](#))。また、その時に新たに復活したすべての信者が裁かれます。(これは奉仕に基づく永遠の報いを与えるためです [ローマ 2 章 16 節](#); [第一コリント 3 章 10-17 節](#); [第二コリント 5 章 10 節](#))。この長期にわたる「裁きの日」は、「主の日」(再臨と千年王国を一つの壮大な出来事として包含する言葉:[第二ペテロ 3 章 10 節](#)と[第二ペテロ 3 章 8 節](#)を参照、[使徒行伝 2 章 20 節](#); [第一コリント 3 章 13 節](#); [第一テサロニケ 5 章 2 節](#); [第二テサロニケ 2 章 2 節](#)も参照)の終末に、千年王国時代の信者の最終的な復活とその裁き([黙示録 20 章 11-15 節](#))、そして大いなる白い御座での不信仰者の最終的な裁きで幕が下ります。

6. 報酬動機の正当性

信仰によって、モーセは、成人したとき、パロの娘の子と言われることを拒み、罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる富と考えた。それは、彼が報いを望み見ていたからである。(ヘブル 11 章 24-26 節)

[ヘブル 11 章 26 節](#)が示すように、モーセがエジプトでの権力と名声という物質的な祝福をあきらめるという困難な決断を支えたのは、神から報いを受けるという絶対的な確信でした。このように、将来の報いの約束は、すべての信者にとって正当な動機となるのです([ヘブル 11 章 39-40 節](#))。私たちがこの地上で試練や苦難に耐えるとき、神が約束されたすべてのことが天で成就されることを切望するのです。そして私達の望みの中には主が備えておられる報いを慕い求める思いが確かにあります([第二コリント 5 章 1-10 節](#))。報いは私たちが信仰を持ち続け、希望を集中させ、愛に基づいて行

動することを励まします。すべてのキリスト教の奉仕は報いをもたらし、私たちの永遠の将来への確信を深める助けとなります([第一テモテ 3 章 13 節](#))。同時に、私たちの奉仕が評価されることを確実に知っていることは、この地上での時間や機会を忠実に管理するための努力と継続性を刺激するはずでず([第一ペテロ 1 章 17 節](#))。ですから、私たちは「自分たちはすべきことをしているただの僕である」([ルカ 17 章 10 節](#))ということとは真実ですが、私たちがキリスト・イエスにあって召されている最終目標、「賞与」([ピリピ 3 章 7-14 節](#))を決して見失ってははいけません。

7. 報酬の意義

わたしは思う。今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない。(ローマ8章18節)

信じる者への祝福と報いは、これから地上で直面するかもしれないどんな困難よりもはるかに勝っています。あらゆる苦しみを知っているパウロが、秤(はかり)に例えて、「永遠の栄光の重さ」と苦しみを天秤にかけると、<苦しみは>(救い、復活、報いに対して)「軽い」と言えるほどです。この世では「小さなこと」に見えることでも、天の御国では大きな報いを受けるのです([ルカ 19 章 17 節](#))。私達の個々の奉仕における困難は、報酬を更に確かなものにします。このような理由から人ではなく神から報われるように努力し([ルカ 14 章 14 節](#))、人生の一過性の物質的な楽しみではなく、天の永遠の報酬に心を向け([マタイ 6 章 20-21 節](#))、長い目で見れば得るものしかないということを中心に留めながら、主に従うことを第一とするように努めるべきです([ルカ 18 章 22 節](#))。

8. 報酬のレベル

日の栄光があり、月の栄光があり、星の栄光がある。また、この星とあの星との間に、栄光の差がある。(第一コリント15章41節)

救いは神からの無料の贈り物であり、完全にイエス・キリストにおける神の働きによってもたらされ、私たちのどんな努力によるものでもないことが[エペソ 2 章 8-9 節](#)で明らかにされています(参照:[テトス 3 章 5 節](#))。しかし同じ箇所[の 10 節](#)は、私たちが神の新しい造られたものとして、キリストにあって「神があらかじめ備えてくださった良き行いをするために」創造されたことも示しています。私たちに課された「良い働き」を成し遂げることは、私たち自身の献身と実行を必要とし、その正当な努力と成果の程度に応じて、神は報いてくださいます([マタイ 25 章 20-23 節](#); [第一コリント 9 章 24-27 節](#))。このような努力への報いを希望として、「善を行うことに疲れてはならない」と私たちは言

われています([ガラテヤ 6 章 9-10 節](#))。神は正しいおかたであられ、私たちの努力の大小を問わず、すべての努力を好意的に見てくださり、それに応じて報いてくださるからです([ダニエル 12 章 3 節](#))。

冠 (かんむり) の教え:

聖書は私たちの永遠の報いについておおまかに語っていますが、それももったもなことで、今は来るべき栄光をぼんやりとしか見ることができないからです([第一コリント 13 章 12 節](#))。しかし、クリスチャンが受ける報いのもっともわかりやすい表現の一つは、「冠 (クラウン)」のイメージで示されています。ギリシャ語のステファノス(στέφανος、ステファンという名前の語源)は、葉や花、時には金で作られた花冠や花輪を指し、王権のしるしであるディアデマ(διάδημα、英語の“diadem”に相当)とは明確に区別されます([黙示録 12 章 3 節](#), [13 章 1 節](#), [19 章 12 節](#))。ステファノスの「冠」はギリシャ・ローマの世界で長く豊かな歴史を持ちますが、様々な場面で共通しているのは、軍事、スポーツ、芸術、政治などいかなる文脈であっても、ステファノスの冠は優れた働きや模範的な行動に対する報いとして贈られるということです。同様に新約聖書においても、冠は私たち信者が地上の務めを正しく果たしたことに対する報いを表しています。聖書は三つの異なる冠を示しており、それぞれがこの世での異なる達成のレベルを表しています。

1. 義の冠: 義の冠は信仰の徳に相当するもので、イエス・キリストにおいて成熟し、その霊的な状態を最後まで堅く保ち続けたすべての信者に授けられます。[第一コリント 9 章 25 節-27 節](#)で、パウロはクリスチャンの人生を競争に例え、すべての人が勝利の冠を得られるわけではないと語っています。現在の運動競技と同様に、古代でも競技の勝者には大きな栄光が与えられていました。パウロは、天の冠によって表される報いが永遠で朽ちることなく、この地上の一時的な報いとは比べ物にならないものであることを私たちに思い起こさせます([ローマ 8 章 18 節](#))。また、使徒パウロのような偉大な信者でさえも、過去の業績に安住せず、現在と将来の行いに真剣に取り組んでいたことは重要な点です。[第一コリント 9 章 27 節](#)で、彼は他の信者たちに対しても同じ関心と霊的成長への努力を続ける願いを伝えようとしています(参照:[ピリピ 3 章 13-14 節](#))。私たちが霊的な前進を続けることで、後退しないことが保証されるのです([第二ペテロ 1 章 10 節](#))。この世で「打ち勝つ」すべての人、つまりイエスにあって成長し、信仰によって得た義と一致した生活を送るすべての人([第一ヨハネ 5 章 4 節](#); [黙示録 2 章 7 節](#), [2 章 11 節](#), [2 章 17 節](#), [2 章 26 節](#), [3 章 5 節](#), [3 章 12 節](#), [3 章 21 節](#))、すな

わち「主の御姿を愛した」すべての人に、主の再臨の日に「義なる裁き主」であるイエス・キリストによって義の冠が授けられます([第二テモテ 4 章 8 節](#))。

2. 命の冠：いのちの冠は希望の美德に相当し、この人生の中で圧力や試練の中でも霊的成長を保ち、その成長が信仰の試練によって証明され、最終的な栄光化への希望を最後まで持ち続けたすべての信者に授けられます。だから成熟した信者は、人生の苦難を喜びをもって見ることができます。なぜなら、その試練が「信仰を証明し」、忍耐強い希望の強さを生み出し、それが今の涙のヴェールを貫いて永遠の栄光を見ることを可能にするからです([ローマ 5 章 3-5 節](#); [ヤコブ 1 章 2-3 節](#))。この人生の火の炉で鍛えられた希望によって認められることによって、いのちの冠に象徴される「イエス・キリストの現れにおける誉れ、栄光、尊さ」がもたらされます([第一ペテロ 1 章 6-7 節](#))。困難の時に信仰を保ち、希望を示すことで、私たちは世の中に対してイエス・キリストを世よりも愛していることを示し、いのちの冠という形ある報いが約束されます([ヤコブ 1 章 12 節](#))。いのちの冠は、私たちがどんな試練や誘惑を悪魔から受けても耐え抜くための強力な動機となります。神は私たちの一貫した信仰の忠実さに必ず報いてくださるからです([黙示録 2 章 10 節](#))。

3. 栄光の冠：栄光の冠は愛の徳に相当しており、人生で与えられた務め(ミニストリー)を忠実かつ正しく果たし、神の愛を最後まで示し続けたすべての信者に授けられます。このため、パウロは自分の教会の人々を「冠」と呼ぶことができました。なぜなら彼らはパウロの忠実で愛に満ちた、主への奉仕の証しであり、それが報いとなるからです([ピリピ 4 章 1 節](#); [第一テサロニケ 2 章 19 節](#))。[第 1 ペテロ 5 章 1-4 節](#)では、栄光の冠は正しく務めを果たしたすべての牧師に約束されています(他の信者に否定されているわけではなく、牧師への例示として特に約束されているのです)。ペテロは、私たち皆が持つべき奉仕の態度をいくつかの対比で特徴づけています。「仕方なくではなく、神の望むままに進んで;見返りを求めず、熱心に;支配者のようではなく、群れの模範として」([2-3 節](#)、[第一コリント 9 章 16 節](#)参照)。ペテロがこの点を強調するのは驚くことではありません。なぜなら、キリストの群れの世話、すなわちすべての奉仕者が任された務めは、主がペテロと最後に本格的に話した時の主な関心事だったからです([ヨハネ 21 章 15-19 節](#))。主は何度も強調し、すべての真の愛は奉仕によって現れると示されました。私たちが本当にイエス・キリストを愛しているならば、それぞれに与えられた務めに従って教会という主の体に奉仕するでしょう。そのような奉仕こそが愛の証であり、栄光の冠という報いを受けます。イエスが「忠実なしもべ」のたとえ話で語られたように、この種の奉仕は、イエスの再臨のときに豊かに報いられるのです([マタイ 24 章 45-51 節](#); [ルカ 12 章 41-48 節](#))。

次のリンクも参照下さい: [The Judgment and Reward of the Church.](#)

4.いばらの冠: 現代のいわゆるクリスチャンの一部のグループが、この世での繁栄を約束する傾向があるため、冠の教義について最後に重要な注意をしておきます。主イエスは、完璧な奉仕の人生を歩まれ、私たちすべてのために死ぬほどの奉仕をされましたが、この世からは感謝されるどころか、いばらの冠をかぶせられ報いられました([マタイ 27 章 29 節](#))。それにもかかわらず、主はこの世の正当な王であることは変わりません([ヘブル 2 章 9 節](#))。私たちは、キリストが正当に主権を握る時が神の定めた時であることを待たなければなりません([黙示録 19 章 12 節](#))。そして、現在の世の支配者である悪魔の敵である私たちは、この世の報いに目を向けてはならないのです([詩篇 17 章 14 節](#); [第一テサロニケ 3 章 3-4 節](#)参照)。むしろ、私たちの希望は、決して色あせることのない、これから来る神の国における滅びることのない相続財産に向けられるべきです([第一ペテロ 1 章 4 節](#))。

結論: 神のことばに耳を傾け、それを信じ、その教えに従って生きようと努めるすべての人には、霊的成長がもたらされます。その成長には、信仰・希望・愛という三つの徳が伴います。キリスト者の愛(それを支えるのが信仰と希望です)の究極の目的は、奉仕(ミニストリー)です。すなわち、他の人々がキリストを得て、私たち自身がそうであったように、キリストのうちに成長するのを助けることです。ですから、私たちは、神がこの地上で私たちに与えられた霊的な務めを、どのようなものであっても忍耐をもって果たし続けるべきです。私たちは知っています。この労苦は主イエス・キリストにおいて決してむだになることはないのです([ガラテヤ 6 章 9-10 節](#))。このようにして、ペテロが[第一ペテロ 1 章 2 節](#)で祈っているように、私たちは「恵みと霊的な繁栄」が豊かに与えられ、神のご計画の実現のために他の人々を助けるという、キリストの愛に基づく働きのすべてにおいて、私たちが支えられることを確信できるのです。

[ペテロ#19「霊的再生」に続く]